

## 日本におけるラングストン・ヒューズ

—その紹介の経緯について—

ニュー・ヨークの黒人街ハーレムの桂冠詩人として記憶されるアメリカの黒人詩人ラングストン・ヒューズ (Langston Hughes) (一九〇二—一九六七) は、一九三三年(昭和八年)に来日し、短い滞在の記録を二冊目の自叙伝『すすらいつづ驚く』(*I Wonder as I Wander*) (一九五六)に残している。そのときヒューズは世界一周旅行の途中で、ソヴィエトを經由してアメリカに帰国する道すがら、わが国に立ち寄ったのである。ヒューズの最初の予定では、モスクワを発ったあと、中国に渡り、北京を訪れるつもりであったが、東支那鉄道を日本軍が切断してしまったために、東支那鉄道経由で北京に行くことは断念するほかはなく、日本に立ち寄り、日本経由

で中国に渡ることにしたのであった。

シベリア鉄道でウラジオストクまで来たヒューズは、船で日本海を渡り、一九三三年六月二三日に敦賀に上陸、京都で一泊したのち、東京に向かい、東京では、前々からフランク・ロイド・ライトの建てたホテルであると散々、聞かされていた帝国ホテルに逗留する。最初の数日間は、無為に過ごしていたようであるが、そのあとヒューズは築地小劇場に出かけている。

実は、ヒューズはモスクワで、築地小劇場の元の演出家セキ・サノ(佐野碩)と会っていて、佐野がヒューズの来日の予定を築地小劇場の俳優たちに手紙で知らせてあったので、芝居の上演後、舞台裏を訪れたヒューズは、

斎藤 忠利

この劇場を訪問した最初の黒人作家として、俳優たちから暖かく迎えられた。

そもそもヒューズが、築地小劇場を訪れたいと思ったのは、この劇場でドゥボウズ・ヘイワードの『ボーギー』(DuBoise Heyward, *Porgy*) (一九二五)<sup>(1)</sup>その他の外国の芝居が上演されたことを聞いていたからであるが、左翼運動の中心であった、この前衛的な劇場が警察の監視下にあったことを最初、ヒューズは知らなかった。しかしながら、その日ヒューズは、ホテルに帰るまでの間に、芝居の上演中、警察の検閲官が台本を見ながら、俳優の台詞を監視していたことを察知している。その後ヒューズは、警視庁で尋問を受けることになるが、日本の警察は、ヒューズがモスクワで佐野碩と会ったことも情報として掴んでおり、ヒューズがモスクワから秘密の指令を受け取って来たのではないかと疑っていたことがわかる。また、帝国ホテルの従業員までが、ヒューズが築地小劇場に行こうとしていたことを、警察に通報していたらしかった。

その翌日、ヒューズの来日を知った日本の作家や俳優たち、美術家や新聞記者たちが何人か、帝国ホテルにヒ

ューズを訪ね、そのあと二週間ほどは、インタヴューやら、寺院、劇場、公園、大学などへの案内、晩餐会への招待があって、ヒューズは自分自身の時間が無い、と悲鳴をあげるほどの歓待を受ける。もちろん、ヒューズが会っているのは、主に芸術関係の人々に限られていたが、その人々を通じてヒューズは、自分が日本人の間で全く無名の黒人詩人ではないことを知った。ヒューズは書いている——

わたしの詩のいくつかは、すでに翻訳され、ある日本の文芸誌に発表されていたし、わたしの肖像が——それは、写真をもとに描かれたものだった——その表紙に載っていた。そして、その肖像では、わたしは、ちよっぴり垂れ目で、すっかり日本人であるように見えた。わたしのハーレムのブルースの詩篇の翻訳は、なかなか上手にできていて、東京でかなりの注目を惹いている、とのことだった。ブルースは、日本では知られていないものではなかった。W・C・ハンディの古典的作品「セント・ルイス・ブルース」は、非常に人気があった。その歌詞は、

日本語に翻訳されていた——「わたしは夕陽の沈むのを見るのが嫌だ」——、また、そのレコードは東京のジュークボックスで、さかんに回っていた。東京のジャズ・バンドは、何人かのフィリピンミュージシャンも加わっていて、見事なジャズの演奏をした。<sup>(2)</sup>

ヒューズがここで言及している日本の文芸誌は、一九三二年（昭和七年）に創刊された『新英米文學——the newer spirit in british & american literature』であり<sup>(3)</sup>、この文芸誌は、小野健人氏を編輯兼発行者として、月刊、この年の二月一日に創刊号が発行され、最初、定価は、一部参拾銭であった。また、そのサブ・タイトルがすべて、英語の小文字で書かれているのは、その当時、いわゆる小雑誌（“little magazine”）のひとつとして有名であった国際雑誌『トランジション』(Transition)のタイトルに做ったものと言われる。

さて、この文芸誌の創刊号は、「ヂェイムズ・ジョイス特輯号」で、寄稿者には、西脇順三郎、阿部知二、竹友藻風、澤村寅二郎、高垣松雄、佐藤清、矢部貞治、西

川正身ほかの、錚々たる先生方の御名前が見られ、その大きな特徴は、その創刊号がジェイムズ・ジョイス (James Joyce) (一八八二——一九四一) の紹介に力を入れているところからも分かるように、英・米のモダニズムの文学の紹介・受容を試みるころにあつたようであるが、その一方、それと関連してマルキシズムに対する関心を示す論考も掲載し、さらにアメリカのプロレタリア文学の動向などにも目を配っている。

また、その編集方針として、毎号、表紙に英・米の作家の肖像を掲げているが、創刊号（二月号）はジョイス、三月号はセオドア・ドライサー (Theodore Dreiser) (一八七一——一九四五)、四月号はオルダス・ハックスレー (Aldous Huxley) (一八九四——一九六三)、五月号は D・H・ロレンス (D. H. Lawrence) (一八八五——一九三〇)、六月号はリリアム・オフレアティ (Liam O'Flaherty) (一八九七——一九八四)、七月号はエドワード・ウィルソン (Edmund Wilson) (一八九五——一九七二)、八月号はヴィクトリア・サクヴィル・ウェスト (Victoria Sackville-West) (一八九二——一九六二)、九月号はラングストン・ヒューズ、十月号は

シトウエル姉弟 (The Sitwells) —— イーディス・シトウエル (Edith Sitwell) (一八八七——一九六四)、オズバート・シトウエル (Osbert Sitwell) (一八九二——一九六九)、サシエヴヘル・シトウエル (Sacherevell Sitwell) (一八九七—— ) —— 十二・一月合併号はシャーウッド・アンダーソン (Sherwood Anderson) (一八七六——一九四一)、二・三月合併号はジョン・ゴールズワージー (John Galsworthy) (一八六七——一九三三)、四・五月合併号はジョン・メイスフィールド (John Masfield) (一八七八——一九六七)、飛んで八月号はシンクレア・ルイス (Sinclair Lewis) (一八八五——一九五一) の肖像が表紙を飾っている。

ノーベル文学賞を受賞した作家を含めて——シンクレア・ルイスは一九三〇年に、また、ジョン・ゴールズワージーは一九三二年にノーベル文学賞を受賞している——この当時の英・米文学を代表する作家たちとならんで、三十歳になったばかりのラングストン・ヒューズの肖像が、この文芸誌の表紙に用いられた経緯は、残念ながら明らかではないが、さきにこの文芸誌の特徴のひとつとして挙げておいた、アメリカのプロレタリア文学へ

の関心と関係があるのではないかと思われる。また、その六月号からは、アメリカの詩人ヴェイチェル・リンジー (Yachel Lindsay) (一八七九——一九三二) の、黒人の魂について歌った詩『コンゴウ』(The Congo: A Study of the Negro Race) (一九一四) の評釈の連載が始まっており、ヒューズの詩才を発見したリンジーとの関連から、アメリカ黒人の文学の新しい担い手として、ヒューズが存在が目されたのかも知れない。

ともあれ、『新英米文学』は、ヒューズの来日に先立つこと十か月前に、恐らくその時点ではヒューズの来日を予想だにせず、ヒューズの肖像をその表紙に掲げて、ヒューズに敬意を表していたことになる。そこで、ヒューズが来日したとき、その年の『新英米文学』の八月号はそのことを報じて、「Chronicle and Comments」欄に、次のような記事を掲載している——

●アメリカの Negro Poet として有名な Langston Hughes が 6月23日に敦賀に上陸した。この記事を載せたのは恐らく「日日」だけであらう。Hughes は世界漫遊の途上ドイツで例のナチスに追はれ、日

本にやって来たのである。漫遊の目的は世界の著名な文學者に會見することにあるらしい。日本では菊池寛氏とヨネ・ノグチ氏に會見の豫定をつけてゐるさうだ。果して目的を果したか否か? 「新英米文學」は昨年(1954)の9月、表紙に彼の肖像を掲げて、*Portrait homage* を捧げたことであつた。あの大きな寫眞を見て、さぞ驚いたであらう——若し Mr. Ono が *interview* を果したとしたら……〔原文のまま〕<sup>(5)</sup>

また、編輯ノートには、

●アメリカの黒人詩人 Langston Hughes が來朝したことは英語關係の雑誌は勿論、新聞は殆ど氣がつかなかつた。本誌では小野健人が Hughes に會つたのみか、彼の未發表の詩と、キューバ詩人の譯稿を貰つて來た。今後アメリカから『新英米』に絶えず寄稿することまで約束させた。來月號にその *interview* 及び詩稿を發表する。〔原文のまま〕<sup>(6)</sup>

と、ある。

『新英米文學』の同人たちが逸早くヒューズの來日を知り、同人のひとり(1954)が來日したヒューズと會見して、「ヒューズの未發表の詩」の原稿を譲り受け、これを同誌に掲載することに成功したのは、まことに快挙と言つてよく、かつて同誌の同人のひとり(1954)で、その編集にもあたられた西川正身先生が、次のように言っておられるのも、もっともである。

それから、早いころの國際交流の一例といひましょうか、アメリカの黒人作家ラングストン・ヒューズが未刊の詩集の原稿からえらび出して、"Share Croppers & Other Poems" を發表していることも注意していいでしょう。<sup>(7)</sup>

〔なお、ここで、誰しも興味をそえられることは、この文芸誌の同人たちが、どのようなルートでヒューズの來日を逸速く察知したのか、という点であろう。これは、あくまでも推測でしかないが、さきにも触れたように、築地小劇場の俳優たちは、モスクワ在住の佐野碩からヒ

ヒューズ来日の予定を手紙で知らされており、その筋から『新英米文學』の同人たちは、ヒューズ来日の情報を得ていたのではなからうか。また、ヒューズは二週間ほどの東京滞在中に、英文學の教授をしている、ある日本人とその夫人の客として、歌舞伎座で歌舞伎の興行を見ている。ヒューズを歌舞伎見物に招いた、この英文學教授夫妻がどなたであったのかは、今までのところ確かめる術がない。この点も、是非、明らかにしたいところである。]

さて、『新英米文學』はその予告通りに、次号、九月号に「特別寄稿」という形で、ヒューズの『Black Belt』其他の詩」を、原詩に譯註をつけて掲載している。譯註者は、高垣松雄先生で、その前書きには以下のよう  
に書かれている——

アメリカの青年詩人 Langston Hughes が去六月下旬に日本を訪れた時、新英米文學同人は幸にも彼に會ふ機会をもち、且つ未刊詩集の原稿を本誌に掲げる特權をえた。詩人から托された詩稿は總てで二十三篇、之を“Black Belt”、“Mingled Breath”、

“Broke”の三部に大別してあるが、それらの詩章の全部を本誌に掲載することは、誌面の都合で、不可能である。それで、本誌には其中から數篇だけを擇んで紹介することにした。なほ參考までに全二十三編の表題を次に列擧して置く。

“Black Belt”

Share-croppers. Negro Servant. To Certain  
Negro Leaders. Black Seed. Christ in Alabama. Black Belt. October 16.

“Mingled Breath”

Desire. Dream. Fulfillment. God. Moon-Colored Nymph. Haven. Dying Beast. Ph. D.  
“Broke”

Fired. Lover's Return. Sylvester's Dying Bed. Six-Bits Blues. Broke. [原文(2) 註]

ヒューズから渡された詩篇の数は、合計二十三篇であったとのことであるが、ここに引用したリストによれば二十篇で、このほかに三篇あったことになる。ついで、高垣先生は、ヒューズの短かい略歴を紹介したので、

“NEGRO SERVANT” (「使はれているニグロ」)、“TO CERTAIN NEGRO LEADERS” (「或る黒人指導者に寄せる」)、“BLACK SEED” (「黒い種子」)、“BLACK BELT” (「タイトル訳を欠く。(筆者)」)、“SIX-BITS BLUES” (「七十五仙ブルース」)の五篇を、原詩に訳を添えて紹介している。

選ばれている詩のうち、最初の四篇は、差別され、抑圧され、搾取され、ときに懐柔される黒人たちをうたった作品であり、また、五番目の「七十五仙ブルース」は、アメリカ黒人の間で生まれた歌曲ブルースの、やるせない気分を芸術化したとされるヒューズ独特の作風をうかがわせる作品であって、どのような観点から以上五篇の作品が選ばれているかは、誰の目にも明らかであろう。

ついで『新英米文學』の十月号は、再び「特別寄稿」として『SHARE-CROPPERS & Other POEMS』と題し、今度は原詩だけを、訳を添えずに、簡略な註を加えて掲載している。選ばれている作品は、“OCTOBER 16”, “DESIRE”, “SHARE-CROPPERS”, “CHRIST IN ALABAMA”, “DREAM”, “FULFILLMENT”, “GOD”の七篇である。その最後に加えられた

註には、(M・T・)という頭文字による署名があり、この署名が高垣松雄先生のものであることは間違いない。その注を以下に引用すると――

Langston Hughes の特別寄稿をえた本誌は、九月號にもその一部分を發表したが、今月も彼の未刊詩集から數篇を抜いて紹介しうることを喜ぶものである。原詩は平易な語句で書かれてゐるから、今度は譯を附せず、簡略に註を加へることにした。

SHARE-CROPPERS——アメリカ南部諸州では棉花栽培が行はれて、そのための勞働力は黒人が供給してゐることは周知の如くである。此詩は木村毅氏が邦譯して「小作」と題し『改造』九月號に紹介してゐる。

〔中略〕

DREAM 此詩も木村氏の邦譯あり。(M・T・)<sup>(9)</sup>

〔原文の#6〕

『新英米文學』の同人のひとり(小野健人氏)がヒュ

ーズから渡された二十三〔二十〕篇の詩は、「未發表の詩」もしくは「未刊詩集の原稿」であったとされるが、そのうちの十篇はすでに『オポチュニティ』(Opportunity)その他の雑誌に發表されたことのある作品であり、未發表であった残りの十篇のうち、七篇はその後、ヒューズの詩集『ハーレムのシェイクスピア』(Shakespeare in Harlem) (一九四二)および『驚異の野原』(Fields of Wonder) (一九四七)ほか、雑誌類に再録される。しかし「Black Belt」、"Moon-Colored Nymph", "Haven"の三篇は、このあと、いずれの詩集にも雑誌にも再録された形跡がないので、そのうちの一篇だけとはいえず、「Black Belt」が選ばれて、『新英米文學』に掲載されたことは、まことに有難いことであつたと言わなければならぬ。

そこで、この詩を以下に引用して、試訳を付してみた

Black Belt

There stands the white man,

Boss of the fields——

Lord of the land

And all that it yields.

Here bend the niggers,

Hands to the soil——

Bosses of nothing,

Not even their toil.

黒土(人)地帯

あそこに立つのは白人

農地のボス——

土地と

それが生み出すものすべての主人

ここで身体を曲げているのは黒んぼたち

土地にしばられた勞務者たち——

何ひとつ ままならぬ

自分たちの勞苦すらも

この詩には、白人の地主の土地で酷使される黒人たちが無産階級に属する人々であることが示され、事実を事実として客観的に述べている描写の背後に、このような形で行なわれている人種差別に対する無言の抗議といったものが秘められており、いかにも一九三〇年代的な作品である、と見る事ができる。

また、さきほど引用した、明らかに高垣松雄先生の書かれた注によれば、『新英米文學』と同時平行的に、木村毅氏によるヒューズの詩作品の翻訳・紹介が行なわれており、そのような試みも矢張り、ヒューズの来日を契機としていることは確かであり、こうして、わが国における最初のアメリカ黒人の詩の紹介・受容が始まったことは、記憶されてよい。

ところで、東京滞在中にヒューズは、日本人と外国人とで構成されているパン・パシフィック・クラブの月例の昼食会に招かれ、スピーチを行なっている。そのとき、アメリカ領事館員の妻で、セント・ルイス出身の白人女性と隣り合わせに坐ることになった。その当時、アメリカ本国のセント・ルイスでは、人種差別が徹底して、

ホテルでもクラブでも黒人が白人——それも女性——と一緒に食事をする事など、殆ど不可能であったから、東京の公けの昼食会でそのような差別を受けなかったことは、ヒューズにとって愉快な体験であったに相違ない。しかし、その数週間後、中国の上海に渡り、孫文夫人（宗慶齡）に会ったヒューズは、「大洋丸」で帰国する途中、再び日本に立ち寄ったとき、神戸と横浜の港で役人から訊問を受ける。ヒューズの動静は、逐一、日本の警察の知るところとなっており、ヒューズは危険人物として監視されていたのであった。

それでもヒューズは上陸は許可され、一か月前に泊まったのと同じ、帝国ホテルの客室にもどってきた。その日、夕食のあと作家をよそおった警察官たちの来訪があり、アメリカの左翼作家たちについての質問を受ける。そのとき、その警察官たちは、つい最近まで投獄されていた『太陽のない街』（一九二六）の作者、徳永直（一八九九——一九五八）を同道しており、ヒューズは徳永と短かい挨拶を交わしている。

その翌日、日本の作家たちとの昼食会に出かける準備をしていたヒューズは、警視庁からの呼び出しを受ける。

警視庁に連行されたヒューズは、拘引されたのではないと聞かされながら、実は拘束されて、ソヴィエト經由で来日した理由、中国に渡った理由、孫文夫人に会った理由、築地小劇場へ行った理由などについて尋問されたあと、自分が日本では“*persona non grata*”（「好ましくない人物」）として見られていることを聞かされ、日本退去を求められる。

このときヒューズは、その二日後の七月二十五日に出港する「*太平洋丸*」に乗り込むことになっていたが、「*太平洋丸*」に乗船するまでの間、二人の私服刑事につきまとわれ、船に乗り込む途中で買い求めた日刊新聞『*ジャパン・タイムズ・アンド・メール*』（*Japan Times and Mail*）には、「黒人作家、警察により日本退去を求められる」という見出しで、ヒューズの国外追放が報じられていた。その新聞は、ヒューズが尋問を受けたこと、また、その日「*太平洋丸*」で帰国の途についたことを報じたあと、さらに続けて、以下のように書いていた――

月曜日の、終日にわたる取り調べのあと、警察はその黒人が共産主義者ではないという確信を得たが、

ともかくにも日本を退去するように命じた。自分の経験を論じながらヒューズ氏は、アメリカ領事を呼び出すことを許されたい、という自分の要請が拒否された、と語った。……ヒューズ氏は、已むを得ざる以上に一分たりとも、この国に留まる意図はなく、最初の船に乗って出国すると言明した。この点で、ヒューズ氏の願いは、警察のそれと偶々、一致した。<sup>(10)</sup>

日本を発った翌日、ヒューズはホノルルに立ち寄り、そこで『*ニュー・ヨーク・タイムズ*』を読むが、その中に、一九三三年七月二十五日、火曜日、東京発のA P通信社の特電が掲載されていた――

作家、日本を去る

J・L・ヒューズ、共産主義に関する訊問を受けたのち出国

アメリカの黒人作家ジェイムズ・ラングストン・ヒューズは、昨日、六時間に及ぶ東京の警察の訊問を

受けたのち、本日、横浜から蒸気船太平洋丸に乗船した。

警察はヒューズが、激しい弾圧を受けている日本の共産主義運動と通じ合っているのではないかと、疑っていたが、このことは証明されなかった。しかし警察は、ヒューズが直ちに日本を離れてはどうか、と「提案した」。

ヒューズは、最近ソヴィエトを訪れ、その後、上海から日曜日に当地に到着した。ヒューズのホテルを訪ねた十一人の日本人も、共産主義との関係を疑われて訊問を受けたが、その後、釈放された。<sup>(11)</sup>

また、ホノルルでヒューズは、東京を発つ前に行なわれたとされるヒューズとの会見記と称するものを見せられた。その会見記は、さきにヒューズの来日を報じた『東京日日』新聞が掲載したもので、その中でヒューズは、日本が世界の有色人種の予定された救済者であり、アジアの指導者であり、日章旗をかかげた軍隊が文化を伝播している、たち遅れた中国の地域での偉大な安定勢力であると述べたことになっていた。それは明らかに、

ヒューズとの会見記なるものをデッチ上げて、新聞に流した日本の警察の仕業であって、警視庁でヒューズを訊問した係官が述べたことを、ヒューズ自身が喋ったことにされてしまい、ヒューズは日本の帝国主義を口を極めて称賛した、と報じられてしまったのである。ヒューズは、このデッチ上げの会見記は、日本の訪問者を騙すにしても極めて卑劣で、軽蔑すべきものである、と考えて憤慨に堪えず、その気持ちは、二十三年後に書かれた自叙伝の中でも燃っており、「わたしは会見などしたことはなかったし、新聞記者に会ったこともなかった。真っすぐ自分の船室に入ってしまうまで、私服の刑事につきまとわれていたのだから、わたしは日本の指導力をほめそやすことはおろか、誰にもお別れのさよならを言っていない」と、ヒューズは皮肉たっぷりに書いていた。<sup>(12)</sup>

ホノルルに着いたヒューズを不快にさせたのは、それだけではなかった。ホノルルの桟橋には、ヒューズを出迎えた新聞記者たちのほかに、FBI(連邦捜査局)の係官が姿を見せていた。もちろん、ヒューズはその後、自分の動静がFBIの監視下にあったことを察知したが、

ヒューズに関する、上海の外国警察の報告書と東京の警察の調査が、上海のアメリカ総領事の秘密文書の形でアメリカ国務省に報告されていたことは、知る由もなかった。ヒューズの死後、公開されたアメリカ国務省極東担当局 (the U. S. State Department's Division of Far Eastern Affairs) の秘密文書に、日本の当局が作成した、ヒューズに関する調査がファイルされていたが、ヒューズは日本の警察の訊問に対して、次のように答えたことになっている——

わたしの名は、ジェイムズ・ラングストン・ヒューズ、三十一歳、アメリカはミズーリ州生まれ。……両親は、黒んぼ (niggers) で、わたしが子供の頃、離婚しました。わたしは、以下の組織と関係しております——

国際革命作家連盟 (International Revolutionary League)

国際革命計画家作家連盟 (International Revolutionary Plot Writers League)

作家連盟 (Authors League)

劇作家組合 (Dramatist Guild)

全米有色人地位向上協会 (National Association for the Advancement of Colored People)

労働者文化連盟 (Laborers Cultural League)

ニグロであることから、わたしは、ニグロたちと抑圧された大衆の解放のために努力してきましたし、その努力を末永く続けます。共産主義は、抑圧された大衆の解放を目指していますが、完全な自由が共産主義の実現によって確保されるものかどうかを、わたしは今もって疑っています。わたしは共産主義者であるとは主張しませんが、同調者と見做されることに反対はしません。なぜなら、すべての共産主義運動、それに、すべての抑圧された人々にも共感し、これを支持するからです。結局、わたしは、共産主義と、抑圧されている人々の解放のための戦いに関心をもち、ひとりのリベラリストなのです。<sup>(2)</sup>……

ヒューズが自ら、自分の両親を「黒んぼ」("niggers") と呼び、「ひとりのリベラリスト」("a liberalist") と名

乗ったとされる点には疑問が残るが、共産主義運動に示している共感は、当時のヒューズの心情を正確に伝えてみると見てよく、二冊目の自叙伝で共産主義に対するヒューズの共感が影を薄くしているのは、この自叙伝がマッカーシズムの「赤狩り」酣の時期に書かれていることよって、説明されるであろう。

〔なお、ヒューズが当時の日本の新聞報道に関して、朝鮮人の犯罪が強調されていることに触れ、その犯罪が人種的なレッテルをつけて報道されるところに、日本における朝鮮人の問題とアメリカにおける黒人の問題との共通性があることを見抜いているのは流石である。〕

ここで話を『新英米文學』に戻すことにするが、ヒューズが帰国したのち、この文芸誌は、その年の十一月号から海外特別寄稿という形で、ヒューズの短篇小説「恥知らずのコーラ」(“Cora Unshamed”)の連載を始めている。この企画は、同人の小野健人氏がヒューズと会ったとき、ヒューズとの間に取りつけた約束——「今後アメリカから『新英米』に絶えず寄稿する」約束——をヒューズが守って、帰国後、その原稿を送ってきたことから実現したものと想像される。この短篇作品は、アメリカ

カ本国では『アメリカン・マキキュリイ』誌(American Mercury)の一九三三年九月号に発表されているから、日本とアメリカでほぼ同時に発表されたことになる。

『新英米文學』では、その原文にK・O・氏——明らかに小野健人氏——による脚注を添えて掲載し、一種の英語教材の体裁をとっている。連載の二回目は、十二月号と翌年の一月号との合併号に掲載され、読者の便宜のために「前号までの梗概」が書かれており、さらに連載の予定はあったらしく、最後に“to be continued.”(「続く、以下次号」)と予告されているが、『新英米文學』は、この合併号をもって廃刊となったので、この文芸誌でのヒューズの短篇作品の連載は完結しなかった。<sup>(14)</sup>

以上に略述したところが、ラングストン・ヒューズの来日の頭末と、わが国におけるこの黒人詩人紹介の事始めとも言えるべき、記念碑的な文芸誌の成果の概要であるが、それにしても来日中のヒューズが警視庁に呼び出され、私服の警官につきまともわれ、ヒューズとの昼食会を予定した日本の作家たちが拘留されたりしたことを考えると、『新英米文學』の同人がヒューズに会い、詩の原稿を託されたことが警察の追求を免れたのは、まことに

僥倖であった、と言わなければならない。また、ヒューズが『新英米文學』を、その自伝の中で「ある日本の文芸誌」とだけ言っているのは、来日後、二十三年も経っているので『新英米文學』の名を思い出せなかったためかも知れないが、その名を明記して累が他に及ぶことを恐れたためかも知れない。

それはともかく、ラングストン・ヒューズの作品の書誌学的研究としては最も浩瀚なものと言ってよいドナルド・C・ディキンソンの『ラングストン・ヒューズの伝記付き書誌一九〇二——一九六七』(Donald C. Dickenson, *A Bio-bibliography of Langston Hughes 1902—1967*) (一九六七)に、『新英米文學』への言及が全く見られないのは、矢張り、片手落ちであると言わなければならない。

つぎに、ヒューズの来日の時期よりずっと後のことになるが、第二次世界大戦以前におけるわが国で、ラングストン・ヒューズの紹介にひと役買ったのは、ヒューズの長編小説『笑はぬでもなし』(*Not Without Laughter*) (一九三〇)の翻訳出版である。この翻訳の訳者は除村ヤエ女史、出版社は白水社、一九四〇年(昭和十五年)

発行で、定価は一圓八十錢であった。

ヒューズの長編小説がこの時期を選んで翻訳・紹介された事情については、現在、これを詳らかにすることができないことを遺憾とするが、「譯者序」には、この作品がシンクレア・ルイスの『本町通り』(*Sinclair Lewis, Main Street*) (一九二〇)の黒人版であるとする批評を踏まえて、以下のように書かれている——

シンクレア・ルイスの「メイン・ストリート」の主人公として採られてゐるのはカレッジを出たばかりの一人のインテリ女性であつて、作者は彼女が現實とかけ離れた觀念的な理想主義にかられて田舎町の傳統と因襲を破らうとしながら、自分自身が破れて行くといふ個人主義者の運命を扱つてゐるのであるが、これに反してヒューズが自分の小説の主人公として選んだのは貧乏な黒人洗濯女を祖母に、白人のお勝手で働く料理女を母に持ち、石油ランプに煤けた小さな家に成育しながら周囲を眺めてゐる一人の未知数の黒人少年であり、彼が黒人といふ存在の制限性に人間として疑惑を持ち始め、因襲の殻を破

らうとするに至る廣い現實的な展望を扱つたものである。同じく田舎町の内部の解剖を試みながら、ルイスが停滞しきつた現實の中で、急進的な女主人公を刹那刹那の統一のない気分の中に破滅させ、批判半ばにして問題を投げ出してゐるのに反して、ヒューズは複雑多様な現實の素材をサンデーといふ主人公を中心によく方向づけ、組織し、その中に統一ある發展的な社會の展望を導き入れたのである。<sup>(15)</sup>〔原文のまま〕

因みにシンクレア・ルイスの『本町通り』は、すでに、アメリカのブルジョア社會を描写した作品であるとして、左翼的な立場からの批判を加えるために、一九三一年(昭和六年)、前田河廣一郎訳で我が国に翻訳・紹介されていたが、『笑はぬでもなし』の中にヒューズは、「統一ある發展的な社會の展望を導き入れた」と訳者が書いてゐるところから判断して、この翻訳も『本町通り』の翻訳を促したのと同じような、傾向的な関心が、その動機となつていたものと想像される。

このように、第二次世界大戦以前にヒューズの長編小

説が翻訳・紹介されるまでになりはしたが、わが国におけるヒューズの紹介が本格化するのは、矢張り戦後のことであつて、その先鞭を着けられたのは木島始氏である。木島氏は先ず、一九五二年に、ラングストン・ヒューズ編『ことごとくの声をあげて歌え——アメリカ黒人詩集』(未來社)を刊行する。この訳詩集は、ラングストン・ヒューズとアーナ・ボンタムの編集した黒人詩集〔Langston Hughes & Anna Bontemps (eds.), *The Poetry of the Negro 1746—1949* (1949)〕から抜粋した作品の翻訳を納めており、その中に収録されているヒューズの作品は、「はくもまたアメリカをうたう」(“I, Too, Sing America”)<sup>16</sup>、「黒人少女のためのうた」(“Song for a Dark Girl”)<sup>17</sup>、「黒人はおおくの河をうたう」(“The Negro Speaks of Rivers”)<sup>18</sup>、「母からむすこに」(“Mother to Son”)<sup>19</sup>、「ワシントン市リンカン記念館」(“Lincoln Monument: Washington”)<sup>20</sup>、「ホームシック・ブルース」(“Homesick Blues”)<sup>21</sup>、「アメリカを再びアメリカにしよ」(“Let America Be America Again”)<sup>22</sup>、「ンリー・ムーアのうた物語」〔作者から直接おくられたタ イプの原稿からこれを訳した。(訳者)〕の計八篇である。

その翌年、拙訳で「自由列車」(“Freedom Train”)、  
「エム様の足許で」(“Feet o' Jesus”)、<sup>1)</sup>「詩」(“Poem”)、  
「祈り」(“Prayer”)、<sup>2)</sup>「わたしの国の人々」(“My People”)の  
五篇が、同人誌『ぼくたちの未来のために』(明日の  
会) 3号に掲載された。この同人誌には、さらに拙訳で  
その26号(一九五六)に「ウイマリー・ブルース」(“The  
Weary Blues”)、<sup>3)</sup>「俺だっつ」(“I, Too”)、<sup>4)</sup>「大きくなっ  
たのだから」(“As I Grew Older”)の三篇、その終刊  
号(30号)(一九五八)に「坊や」(“Baby”)、<sup>5)</sup>「——だも  
んど」(“Reasons Why”)、<sup>6)</sup>「アラバマの地」(“Alabama  
Earth”)、<sup>7)</sup>「水辺の通り」(“Water-Front Streets”)の四  
篇が掲載され、また、この年、ヒューズの第一詩集『も  
の憂いブルース』(The Weary Blues)(一九二六)が拙  
訳で『ニグロと河』と題して、国文社から上梓され、ヒ  
ューズの作品の翻訳・紹介は言わば軌道に乗るに至った。  
これ以後のことに關しては、紙幅の関係から、翻訳さ  
れたヒューズの作品の書誌という形で、リストを掲げる  
だけに留めたい。

木島始訳『ヒューズ作品集——ある金曜日の朝』(飯

塚書店)(一九五九)

浜本武雄訳『笑いなきにあらず』(黒人文学全集第五  
卷)(早川書房)(一九六一)

橋本・浜本編『黒人作家短篇集』(ヒューズの短篇二  
篇を収録)(黒人文学全集第八卷)(早川書房)(一  
九六一)

橋本・浜本編『ニグロ・エッセイ集』(ヒューズの論  
文類三篇を収録)(黒人文学全集第十一卷)(早川書  
房)(一九六一)

木島・皆河編『詩・民謡・民話』(ヒューズの詩十三  
篇を収録)(黒人文学全集第十二卷)(早川書房)  
(一九六一)

斎藤忠利訳『黒人街のシェイクスピア』(国文社)(一  
九六一)

諏訪優訳編『アメリカ・ニグロ詩集』〔ヒューズの詩  
九篇を収録〕(思潮社)(一九六九)

木島始訳『ジャズの本』(晶文社)(一九六八)

木島始訳『ラングストン・ヒューズ詩集』(思潮社)  
(一九六九)

北村崇郎訳『自由のための戦列——NAACPの記  
録』(小川出版)(一九七〇)

木島始訳『ぼくは多くの河を知っている——ラングス  
トン・ヒューズ自伝1』(河出書房新社)(一九七  
二)

木島始訳『きみは自由になりたくないか?——ラング  
ストン・ヒューズ自伝2』(河出書房新社)(一九七  
六)

木島始訳『終りのない世界——ラングストン・ヒュー

ズ自伝3』(河出書房新社)(一九七六)

古川博巳訳『片道きっぷ』(国文社)(一九七五)

嶋岡晨・松田忠徳訳『世界黒人詩集』〔ヒューズの詩  
二篇を収録〕(飯塚書店)(一九七五)

木島始訳『ジャズ』(飯塚書店)(一九七七)

木島始編訳『ラングストン・ヒューズ評論集——黒人  
芸術家の立場』(創樹社)(一九七七)

斎藤忠利訳『驚異の野原』(国文社)(一九七七)

最後に、ヒューズが筆者に贈ってくれた自叙伝『さす  
らいつつ驚く』の扉に書かれた、見事な筆跡の献呈の辞  
を掲げて、拙稿を閉じることにした。

Inscribed especially  
for Tadatoshi Saito,  
my second life —  
with seven to go  
(like a cat with  
nine lives) —

Sincerely,  
Langston Hughes

New York,  
March 12,  
1962.

- (1) 『ボーギー』は黒人の乞食を主人公にした小説であるが、のちにヘイワードは夫人と合作で劇化し、ヒューリッツァー賞を得た。
- (2) *I Wonder as I Wander* p. 242.
- (3) この文芸誌について、いろいろとご教示下さったのは、元東京大学文学部教授の西川正身先生であり、以下の記述は、先生のご教示に負うところが多い。貴重な資料をお貸し下さった先生に深く感謝申し上げる。
- (4) 一九二五年の冬、首都ワシントン市内のワードマン・パーク・ホテルで給仕人助手として働いていたヒューズは、そのホテルで開かれた詩の朗読会のために逗留したヴェイチェル・リンジイの食卓に、自作の詩三篇を置き、これを読んだリンジイはヒューズの詩才を発見し、黒人詩人ヒューズの名が広く知られるようになった。Cf. Langston Hughes, *The Big Sea* (1940) p. 212.
- (5) 『新英米文學』(一九三三)八月号、75頁。
- (6) 同誌、76頁。
- (7) 西川正身『アメリカ文学覚え書』(増補版)(一九七七)395頁。
- (8) 『新英米文學』(一九三三)九月号、72頁。
- (9) 同誌、十月号、41頁。  
なお、『改造』(一九三三年、九月号)(90~91頁)には、木村毅氏によるヒューズ紹介と、訳詩二篇(「小作」および「夢」)が掲載されているが、この記事は、目次では「追放された黒人藝術家」、本文では「黒人詩人ヒューズ君」と題されている。なお、學藝自由同盟の有志と共にヒューズと会った木村氏は、『新英米文學』の同人、小野健人氏がヒューズから渡された詩稿の一部を分け与えられて、ヒューズの詩の紹介を試みている。
- (10) Cf. *I Wonder as I Wander* p. 276.
- (11) Cf. Faith Berry, Langston Hughes: *Before and Beyond Harlem* (1983) p. 196.
- (12) *I Wonder as I Wander* p. 278.
- (13) Cf. Faith Berry, *Op. Cit.* p. 197.
- (14) 『新英米文學』(一九三三)十一月号、35~38頁、および十二月・一月(一九三四)合併号、54~56頁参照。
- (15) ラングストン・ヒューズ(除村ヤエ譯)『笑はぬでもなし』「譯者序」8~9頁。  
(一橋大学教授)